
日本財団グローバル若手日系人調査概要レポート

1. 調査の背景と目的

本調査は日本にルーツがある18歳から35歳までの若手日系人の「日系人像」を明らかにするものである。「21世紀における日系人像」に迫るべく、自身のルーツや日系としてのアイデンティティ、家族と日系アイデンティティの捉え方、自身と日系コミュニティとの関連性について、全世界を対象にしたオンラインアンケート(4ヶ国語；英語、日本語、スペイン語、ポルトガル語)を実施した後、アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、日本、オランダ、パラグアイ、ペルー、フィリピン、イギリス、アメリカなど11カ国12都市にてフォーカスグループディスカッション(10人前後の座談会)を行った。なお本調査においては、日系人は「海外に移住した日本人及びその子孫」を指すものとする。

2. 日系社会の歴史

大規模な日本人の海外移住は19世紀中頃、とりわけ1854年のペリー再来航、1868年の明治維新を契機に本格化していった。急速な近代化により、西洋式の経済システム、税制が導入され、日本の産業構造が大きく変容したことで、多くの小作農は収入の減少と失業に直面した。そのような中、好況に沸いていた当時のアメリカ経済の状況も相まって、150名の日本人がサトウキビ畑の労働者として、ハワイに移住していった。これが日系人移住の歴史の始まりといわれている。

このハワイ移住を皮切りに、日本からの移住者は世界中に広がっていった。1990年代末から21世紀初頭には、初期の開拓移民の子孫が日本に戻る逆回転の流れも発生している。また近年においては、世界経済における日本の地位を反映し、欧州全域にも移住が進んできている。

現代の日系人は3つの主要なグループに分けることができる。第一のグループは、19世紀後半から20世紀半ばにかけて日本から移住してきた開拓者一世の子孫である。これらの初期の日本からの移住者は、さらに2つの主要なグループに分けることができる。一つは中南米、ハワイ、北米への移住者である。南米、北米、ハワイなど、アメリカ大陸に先陣を切って移住した人たちの多くは、地方農家や沖縄の息子達であった。移住先では労働者として農場で働いたり、個人商店を経営したり、製造業に励むなど、様々な職に従事していた。日本人女性と移住先で結婚することにより、現地で信仰、文化、経済組織を特徴とする日本人移民コミュニティを形成していった。特に県人会は日本における出身県に強く結びつき、そのコミュニティの基礎を築いていった。現在では、この時代に移住した

日本人の子孫は 6 世にまで広がっている。もう一つの動きは、フィリピンをはじめとするアジア地域への移住である。その子孫の多くはハーフを含む、ミックス¹である。

第二のグループは、第二次世界大戦後の日本占領期に日本人女性と米軍人との結婚によって生まれた集団である。戦争の影響もあり、米国においては移住の規制が厳しかったため、1940 年から 1965 年の間に移住した家族が多かった。このグループの子供や子孫の多くはミックスの日系人である。

第三のグループは 1960 年代以降に移住した日本人である。戦前の移住者との差別化を図るため、この世代の移住者は通常「新日系人」と呼ばれることが多い。新日系人及びその子供の二世の移住先や理由は様々であり、居住地は世界中に広がっている。日本人同士の結婚で日本人の家族として移住した世帯から、国際結婚をしてミックスとなった世帯まで、家族構成や家庭環境も多様である。これまでの移住者と異なり、新一世の出身地は都市部も含む日本全国にわたる。

本調査に協力してくれた 18-35 歳の若手日系人は、移住期間を問わず、全グループにおいて世界に移住した日本人の子孫である。先駆けとなった第一グループの移住者の子孫は 3 世から 6 世まで世代交代が進んでいる。第二グループの移住者の子孫は三世、四世が多い。そして、最も近年移住が進んだ第三グループの子孫はまだ、二世にとどまっている。ヨーロッパやオーストラリア、ニュージーランドなどにおいては特に新日系人が多いことが特徴として挙げられる。一方で、北米や南米、アジアの日系人は第一グループから第三グループまでの子孫であり、祖先の移住期間が様々だ。そのため、その子孫も多様な世代であることが明らかになった。

3. 調査研究手法の概要

本調査は世界に広がる日系人を包括的に理解し、「21 世紀の日系人とは何を意味するのか」という問いに対する回答を得るために、混合研究法を用い分析を行った。また同じトピックについて、異なる補完的なデータを取得するため(Morse, 1991, p. 122)、クレズウェルの三角測量を参考に混合研究法を用いた(Creswell, Plano Clark, et al., 2003)。さらに本調査のリサーチクエスチョンに対する回答を導き出すために(Patton, 1990)、質的調査及び量的調査の両方を用いた収束モデルにて、文化、アイデンティティー、家族とのつながり、コミュニティとのつながり、日本とのつながりの分析を行った (Creswell, 2006)。

本調査ではパイロットアンケート調査を実施後、世界中の人たちを対象にしたオンラインアンケート、その後フォーカスグループディスカッションを行った。パイロットアンケート調査は、2019 年 1 月 2 日から 6 日にかけてロサンゼルスで実施し、その後、オンラインアンケートを 2019 年 1 月 27 日から 2 月 28 日、2019 年 3 月 8 日から 4 月 15 日の 2 回にわたり実施した。アンケートは日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語の 4 ヶ国語で行った。

¹ 日本では「ハーフ」が一般的に使われているが、クォーター、ハバ、アメラジアン、ダブル等類似表現は複数存在する(下地, 2018)。本稿では、「ミックス」で統一することとする。

<https://www.nippon.com/ja/currents/d00443/#>

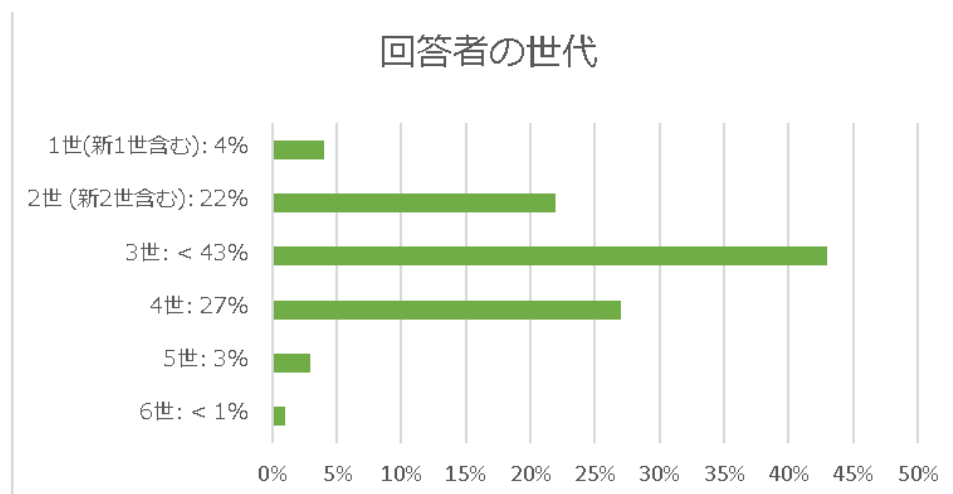
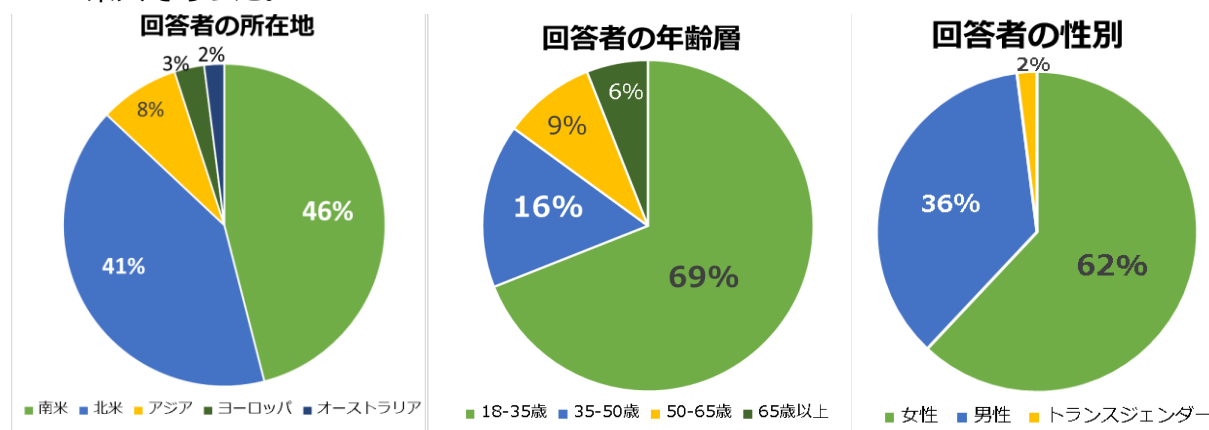
さらにデータの質を高めるべく座談会形式のフォーカスグループディスカッションを開催した。フォーカスグループディスカッションは北米（ホノルル、ロサンゼルス、バンクーバー）、南米（サンパウロ、リマ、ブエノスアイレス、アソンシオン）、ヨーロッパ（アムステルダム、ロンドン）、アジア・オセアニア（東京、ダバオ、シドニー）にて開催した。世界各国における若手日系人のアイデンティティと文化について、それぞれのコミュニティの中でどう位置づけられているか、さらにそのトレンドを検証することもこのフォーカスグループディスカッションを実施した目的の一つであった。

4. 調査結果

a. 回答者に関するデータ

アンケートには、全回答者がすべての質問に回答したわけではないが、合計 6,309 件の回答が集まった。最終報告書では、N=3,839 名（年齢と世代をクロス集計したもの）をベースサンプルとしている。35 歳以上の回答者のデータは、本調査の対象年齢層との比較に使用した。

この研究で得られた重要な人口統計学的知見としては、日系の若者の大多数（約 55%）がミックスであることが明らかになった。この結果は、世代を超えて共通している。その他の人口統計学的情報は以下の通りとなっている。79%が日系人、21%が新日系人であった。



b. 「日系人であることが何を意味するのか」

“日系人は二国間のバランスを取れる人のことである。日系人は日本の価値観を理解し、母国の価値観と融合することができる。(ブラジル)”

日系人²の概念や定義は非常に多様で複雑だ。本調査結果からは日系人の定義や捉え方が個人間で異なることが明らかになった。必ずしも回答者全員が日系人(Nikkei)という言葉に馴染みがあるわけではない。日常的に自身を日系人とは呼ばないが、ルーツが日本にあることを理解し、誇りに思うという回答が若手日系人の間で多く見られた。例えば、近年日本からの移住が多いオーストラリアにおいて日系人という言葉は「アメリカの言葉」として認識されることが多い。またオーストラリア同様、移住歴が浅いオランダにおいても似たような声があがり、現地では日系人という言葉より、ハーフや日本人が一般的だという指摘もあった。イギリスでは日系人にも Japanese British(日系イギリス人)にも馴染みがないという回答もあった。

また、カナダの日系人は Japanese Canadian (日系カナダ人) という呼び方には親しみがあるものの、自身のことを“Nikkei”とは呼ばないという回答も多少あった。しかしながら、馴染みがなくとも、日系人としてのアイデンティティーの要素や概念については理解を示し、共感するという意見が多く見られた。日本の文化にも母国の文化にも触れ、自分のルーツの再確認を通じて、日系人としてのアイデンティティーが確立するものと見られる。

アメリカの日系人にとって血のつながりだけが日系人としてのアイデンティティーを確立する要素ではない。「日系人であることは、コミュニティに属すること」であり、日系人同士で文化に触れ、コミュニティを形成し、帰属意識を高めている。経験や意識だけでなく、文化的記憶を共有することも重要である。日系カナダ人と同様に、アメリカにおいても“Nikkei”より Japanese American(日系アメリカ人)という言葉を使う人が多い。第二次世界大戦の影響を大きく受けたアメリカの日系人にとって、日系人であることは、政治的アイデンティティーを確立するものでもある。アメリカの若手日系人の多くは、強制収容所に収容された日系人の体験から、価値観やモラル、信念、(そしてなぜ日系アメリカ人は日本人らしくないのか³)等を学んでいる。祖父母や身内が実際に経験した戦争の歴史を学ぶことは重要なのだ。

日系人という言葉が最も浸透していたのは南米大陸であり、中でも特にブラジル、ペルー、アルゼンチン、パラグアイでは顕著であった。ブラジルの若手日系人は自身を日系人として認識しており、現地では「日本人(japonês)」と呼ばれる。日常会話はポルトガル語と日本語を混ぜて話す人も多い。ペルーにおいて日系人であることはユニークであり、ペルーと日本の両文化の良き理解者として認識している。ペルーでは日系人のことを

² 原本(英語)では Nikkei と表示されており、日本語以外の調査では Nikkei という単語を使った。日本語の本稿のみ「日系人」と表記する。

³ アメリカの日系人は戦後社会的地位を向上するために、アメリカに忠誠を誓い、同化する社会的な動きがあったため、多くは日本人であることを捨て、アメリカに同化した。日本語を一切話さなくなったり、日本食を食べなかつたりすることでアメリカに忠誠心を示した。

ponja⁴と呼ぶ人も多い。ペルーの日系人は自身をペルー人として捉えているが、日本にルーツがあることも非常に誇りに思っている。アルゼンチンやパラグアイでもペルーと同様に、母国とルーツがある日本の両国と強いつながりを持つことに誇りを感じている。

日系人像を明確にする上で、重要な要素が二つあることが本調査で明らかになった。

日本的価値観：世界中の若手日系人にとって日本的価値観を持つことは重要である。多くは、「頑張る」、「尊敬」、「正直」、「感謝」、「義理」、「礼儀」、「もったいない」などの価値観を重要視していた。若手日系人がこれらの価値観を出身国や地域に関わらず共有して持っていることが明らかになった。そして、これら日本的価値観を家族や先祖から学んだことを誇りに思い、次世代や現地社会にも日本的価値観を継承したいと考える若手日系人が多い。

祖国日本へのルーツ：日系人は日本にルーツがある。日本にルーツがあることは、日本人の子孫であることが大前提となる。血統(日本人の血が流れていること)は重要だが、それだけにとどまらない。若手日系人は日系人としてのアイデンティティーだけでなく、複数のアイデンティティーを所有している。日常生活において様々なつながりや経験が自身の日系人としてのアイデンティティーにも影響を及ぼしている。

c. 価値観

日本的価値観は先祖から受け継いだものであり、世代交代が進む若手日系人にとっても、日本的価値観は日系人の特徴といえるほど重要である。アンケートでは 12 個の日本的価値観と日系アイデンティティーの重要性及び関連性を調査した。その結果、82%の若手日系人が最も重要な価値観として「頑張る」を選択し、この傾向は地域や年齢に関わらず共通していた。次いで、2 位に「尊敬」(78%)、3 位に「感謝」(69%)が重要な価値観として選択された。「もったいない」は年配層⁵では 7 位であったのに対し、若手日系人の間では 4 位であったことは、現代社会における環境問題への危機意識と関連していると考えられる。

d. 文化的要素

言語、食生活、ポップカルチャー、伝統行事など、様々な観点から、日常生活で触れている日本文化や行事が若手日系人のアイデンティティーにどのような影響を与えるのかを考察した。アメリカ、ブラジル、ペルー、オーストラリア、フィリピンを含む多くのフォーカスグループディスカッションにおいて、日本文化は現地社会でも人気があり、日系人や日系社会も一般的には現地社会から肯定的に見られていることが分かる。

日本語能力：自己申告ではあるが、若手日系人の日本語能力には差があることが分かった。7%が「全く話せない」、29%が「単語のみ(片言のみ)」話せる、25%が「少し話せる」、22%が「多少話せる(日常会話レベル)」、17%「流暢に話せる」と回答した。35 歳以上の年齢層の最も多い回答が「少し話せる」及び「多少話せる(日常会話レベル)」であったことから、若手日系人は全般的に日本語能力が年配層に比べて低いといえ

⁴ ペルーのみで使われる単語であり、日系ペルー人のことを指す。

⁵ 対象の 18~35 歳(若手)より上の年齢層。36 歳以上の回答者のことを指す

る⁶。日常生活において日本語を全く使わないと回答したのは23%、月に1回話す程度と回答したのは21%であった。日常生活において日本語を使わない環境が日本語能力低下の要因と推測される。若手日系人の日本語能力（話す・書く・聞く）は80%が初級から中級レベルであるが、50%以上が家庭内のみならず外部機関（学校や補習校含む）で日本語を学んだ経験がある。日本語能力は個人差が大きく出るものの、73%の若手日系人が日本語学習に対する意欲とその重要性を強調していた。日本語の重要性を感じている年配層は平均61%であり、年配層と比較して若手日系人の方が日本語への学習意欲が強い傾向が見られる。

食生活：若手日系人の34%は週1-2回家で日本食を食べ、36%は月に数回日本食を食べに外食する生活を送り、年齢の高い層にも同様の傾向が見られた。しかし、同じ若い世代の中でも、新日系人の31%が週5回以上家で日本食を食べるのに対して、(旧)日系人は11%と同じ年齢層の中でも大きく差が出た。アジアなど日本食が手軽に食べられる地域では、外食で日本食を食べる機会が圧倒的に多いことも明らかになった。アメリカでは、日系人や日本人が経営するレストランで食事をとることはコミュニティーサポートにも繋がるため、積極的に外食をする家庭もあるようだ。

ポップカルチャー：若手日系人はアニメ（21%）や漫画（14%）、カラオケ（13%）などの日本のポップカルチャーに触れている。特にアニメは、全世界共通で最も人気が高かった。(旧)日系人と比較して新日系人の方が日本のSNSへの興味関心が高く情報収集を行っていることは、日本語能力の高さが要因として考えられる。また、若手世代の方が年配層よりポップカルチャーに触れる機会が多いことも明らかになった。

伝統行事：56%の若手日系人がお正月を最も重要な行事と回答した。これは地域や年齢に関わらず一番重要だという共通認識があった。二番目に重要な行事はお盆であった。お正月やお盆など、家族や親戚と祝うことが多い行事が最も重要視されていることから、日系コミュニティーは家族単位から始まり、日本文化における家族の存在や重要性が強調されている。アメリカのお盆祭りは、コミュニティー単位での行事であり、このような伝統行事を通じて日系コミュニティーは日常生活において日本文化に触れている。

日系社会・団体への帰属意識：若手のみならず日系人の全ての世代にとって最も重要な組織は、文化団体(22%)とソーシャルグループ(15%)であった。特にアジアや北米、南米においては、48%の若手日系人がこれらの団体を非常に重要、27%が重要と認識している。日系社会に属することが重要である一方、日系社会や日系団体の孤立性や排他的な性質を懸念する若者も多い。例えば、ペルーにおいては、「(ペルーの)日系社会は閉鎖的なので、知っている人がいないと行事に参加しづらい」といった若者の声もあり、日系団体が今後若者や新日系人も含めた多様なコミュニティーを形成する必要がある。年配層に比べると、若手日系人は県人会や宗教団体からは疎遠になる傾向があり、

⁶ 新日系人においては日本語能力が高い傾向にあった

12%が補習校を含む日本語学校等に強い帰属意識を持っている。しかしながら、同じように 12%の若手日系人はどの団体にも帰属意識を持っておらず、この数値は年配層より高い。どの団体にも属しないと回答した若手日系人の多くはヨーロッパやオーストラリアなど、日系社会の基盤やインフラが整っていない地域において目立った回答であった。

また、本調査の統計分析からは日本語能力と文化継承が強い相関関係にあることが明確になった。日本語能力は日本的価値観の保持と伝統行事の参加等に関係しており、日本語能力が高ければ高いほど、自宅で日本食を作って食べる食文化が強く根付き、日本の伝統行事に参加するなど、より日本文化に接する傾向が強く見られた。すなわち、日本語能力の向上は文化の継承に繋がっていることが分かった。

e. 日系人としての「つながり」

リッカート尺度の質問回答を通じて、自身と周囲の関係性を多方面から考察した。リッカート尺度は1(最小)から10(最大)まで設定されており、1-3は低いつながり意識を持っている、4-6は平均的なつながり意識を持っている、7以上は強いつながり意識を持っている、と定義した。調査結果からは、家族、地元コミュニティー、トランスナショナルの3つのアイデンティティーが収束して、若い世代の日系アイデンティティーの形成に影響を及ぼすことが確認された。

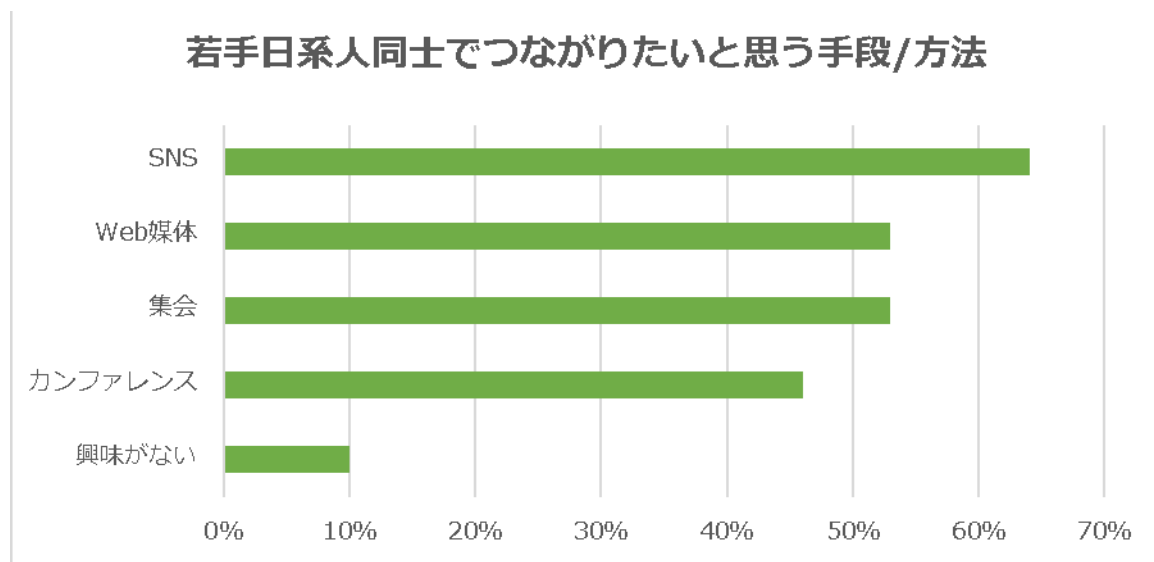
日系人と自分のつながり：個としての日系アイデンティティーの形成：「自分に日本のルーツがあることを誇りに思い、自身に日本の価値観や信念を浸透させること(イギリス)」74%の若手日系人が日系人としての強い意識を持ち、日系人としてのアイデンティティーを確立している。他の年齢層においてもほぼ同じような数値が出たため、年齢や世代に関わらず、日系人は日系人としての自覚や意識が強く、日系アイデンティティーを形成していることが明確である。

地元日系コミュニティーへのつながり（帰属意識）：日系人としてのアイデンティティーは、個の知覚や概念で形成されるのみならず、集団に属することで形成されている。南米とアジアの若手日系人は53%；北米の若手日系人は46%が地元の日系コミュニティーに強い帰属意識を持っていた。しかしながら、オーストラリアやヨーロッパでは、日系社会の基盤がアメリカ大陸ほど整備されていないため、17%しかコミュニティーに強い意識を持っていなかった。これらの地域の若手日系人は、日本語学校や補習校、日本人学校等などの学校機関をコミュニティーと捉え、所属意識を持っていた。

母国と日本へのつながり意識：71%の若手日系人は母国に強いつながりを感じていたことに対して、48%が日本にも強いつながり意識を持っていた。日本に対するつながりは、「それなりにつながりを感じている」層も含めると、79%にまで上る。69%の若手日系人は日本が2020年東京オリンピック・パラリンピックを主催することに誇りを感じており、85%は日系人選手を応援すると回答した。そして多くが日系人の母国そして祖国の日本、そして両国の文化に愛着を持っていた。ペルーの回答者が述べるように、「日系

人であることは紅白を 2 倍にしたもの⁷」という感覚に近いだろう。日本へのつながりや興味レベルは高い一方、日本と繋がるのが複雑だと感じる日系人もいる。その多くは、来日してアイデンティティー崩壊を経験するからである。質的調査からは、「母国にいると日本人と言われ、日本に行くと外国人と呼ばれ、自分が何人か分からない」と言う声が多数あった。

グローバル日系コミュニティへのつながり意識：本調査から、若手日系人は個人と家族、そして地域コミュニティから日系人としてのアイデンティティーを維持しているのに対し、多くは自国や自分のコミュニティ以外の日系人を知らず、他国の日系コミュニティがどのような歴史を歩み、移住者が苦労したのかを必ずしも知っているわけではないことが明らかになった。その一方で、本調査からは 90%の若手日系人が他国の日系人と繋がることに興味を示し、グローバルなつながりを求める若手日系人像が明らかになった。若手日系人が、グローバルなコミュニティを形成し、国を超えたつながりを促進するとともにグローバルな日系アイデンティティーを理解していくことを強く切望している点は、本調査の大きな発見の一つといえる。



5. 結論

本調査における最大の発見は、世代が進むにつれ、日系人としての意識やアイデンティティーが希薄化するどころか、日系人のアイデンティティーや意識が強く継承され、日本とのつながりだけでなく、他国の日系人やコミュニティと横のつながりを広げたいという若手日系人の姿が明らかになったことである。また世界の若手日系人が日本文化を「観察し、解釈し、実行している」という姿も見えてきた。

北米や南米など、豊かで活気があり、移住の歴史を長く持つ地域もあれば、オーストラリアやヨーロッパのように移住の歴史がまだ始まったばかりの地域もある。しかしながらそれらの違いに関わらず、若手日系人は日常生活において日本的価値観や日本文化を取

⁷ 日本もペルーも国旗は紅白である

り込み、それぞれの生活において、個人や家族、コミュニティの中で、日系人としてのアイデンティティを維持している。

また若手日系人は、自分自身のアイデンティティを継続的に形成し、定義していることも分かってきた。この一連のプロセスが、若手日系人が、個人、家族、コミュニティ、グローバルなレベルで日本文化と日系人文化の両方を学び、実行し、それを永続させていくことを可能としているのである。

このプロジェクトのもう一つの重要な発見は、日系コミュニティがグループ内のメンバーからも社会の外からも、ポジティブでユニークなものとして見られているという事実である。オーストラリアのある日系人の参加者は、「オーストラリアには（他の移民コミュニティにはない）日本文化への尊敬の念がある」と述べ、日系コミュニティの独自性について語っている。

結論として、本調査を通じて、世界に散らばる若手日系人は、日本に関する知識や文化をミクロ・メゾ・マクロレベルで習得するなかで、自らのアイデンティティを形成していることが明らかになった。個人(ミクロ)レベルでは、若手日系人のアイデンティティが、個人の信念、価値観、行動及び家族や友人との交流を通じて形成されていることがわかった。

これらの文化交流は、日本語学習、文化祭への参加、文化・社会団体への参加、日本文化の活動への参加など、コミュニティ（メゾ）レベルでも行われていることがデータから明らかになった。同時に、個人やコミュニティレベルで日本とのつながりを維持強化していくことが、引き続き重要であることも示している。さらに日系社会の歴史と現状は、世界中の日系人同士だけでなく、日本に住む日本人にも共有されるべきである。

若手日系人は多様であり、日本文化やアイデンティティの継承度合いにも濃淡がある。その中で彼らは、テクノロジーやソーシャルメディアの利用を通じた日本との象徴的なつながりや、仕事、教育、余暇、日本への渡航などを通じて、日本文化とじかに接することで「日本」を経験しているのである。

このように多様でグローバルな日系人ネットワークを構築することは、個人、コミュニティ、そしてグローバルなレベルで、日本人と日系人のアイデンティティが継続的に再生成され、またその内的対話を理解していくためにも、さらには日本との連携強化を図っていくためにも極めて重要であると言えるだろう。